

春の天気は変わりやすい。暑かったり寒かったりで体調管理が難しいですね。

学校で学ぶ醍醐味

令和6年度が始まり、2週間ほどが経ちました。本日は、授業参観・懇談会にも多くの保護者の方々にお越しいただきました。大変ありがとうございます。昨年度途中から、本校ではたくさんの保護者の方々に授業中のお子さんを見ていただきたいという思いで、数回の自由参観を計画しました。本年度も、ひと月に1回は参観日を設け、ぜひ実際に榆木小へお越しいただきたいと願っています。

授業の中では、子どもたちの様々な表現活動があったと思います。その表現活動も、言葉であったりコンピュータであったりと、色々だったのでは。私たちのころの授業とは、大きく様変わりをしている今日の授業を、どのように考えればよいのでしょうか。

知識は頭の中にある「もの」と考えられがち。実際、100年ほど前までは、知識は頭の中にある「もの」なので、頭の中に書き込むように教えることが教育、という考え方が主流でした。このような教育は、教師が教えることをしっかりと聞き、きっちりと反復し、正解をなぞらせることが目的です。だから、間違いは許されないこと。

実際、これらの教育モデルは、動物実験によって確立されたといわれています。犬に餌をやるときには、ベルをちりと鳴らす。また、ベルをちりと鳴らすと餌を出す。そうしているうちに、ベルをちりと鳴らしただけで、犬は餌がもらえると思ひ唾液を出すようになる。このように、条件付けを行うことで行動を強化していく。白紙のノートにペンで書き込むがごとく、教える教師の意図通りに一様にできるようになっていく。「パブロフの犬」という名で知られる教育に関する古典的な実験です)

そうじゃないんじゃないかなあ～。

もちろん、そういう一面が教育にないことはない。

しかし、本来教育は、目の前の子どもたちが「なりたい自分になる」ための奮闘の場であり、様々な人との出会いやものとの出会い、出来事などの経験による良い意味での変化です。

例えば「野球」。学校で勉強した最初の「野球」という言葉は、単にボールをバットで打って投げて走る無機質のものだったかもしれません。しかし、昨年開催されたWBC（ワールドベースボールクラシック）で見られたような大谷選手の、ダルビッシュ選手の躍動、自分では投げられないような変化球のすごさ、様々な局面にある個性的な対戦場面の数々に魅了された人は大勢いるでしょう。そして、学校でも多くの友達とそのことを、口角泡を飛ばす勢いで語り合ったことでしょう。もしかしたら、生涯の夢を「野球」選手とした人もいることでしょう。

そうしているうちに、学校で勉強した単なる言葉「野球」に、個性的なつながりが生まれ、知っていたはずの「野球」を改めて知ることになる。もちろん、同じようなつながりではないつながりをもつ人もいるはず。そうやって、彩り豊かな教育が行われていくのではないかと、私たちは考えています。その彩りこそが、学校で学ぶ醍醐味だと思うのです。

